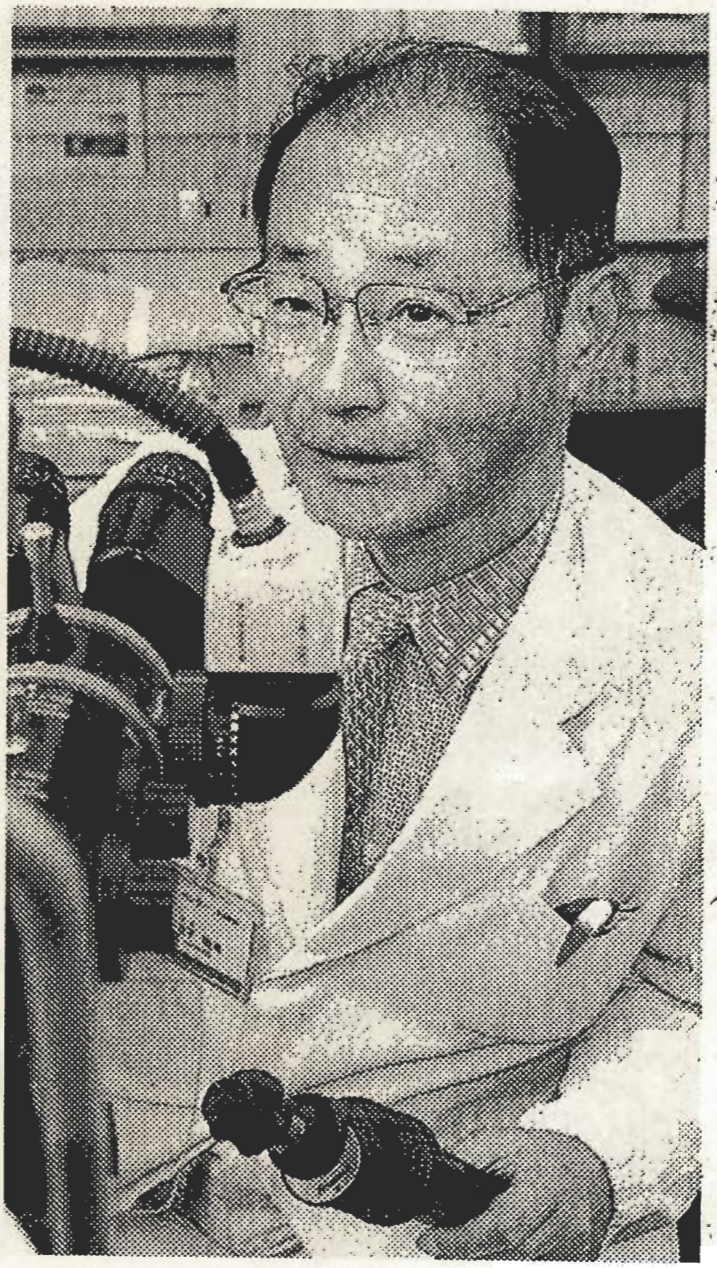
読売新聞 2月19日朝刊 2面

高松宮妃癌研究基金学術賞を受賞する

金子 明博さん 64

顔

「目のがんの勉強ばかりしてた」



数少ない目のがんの専門家で、国立がんセンター中央病院の眼科医長。乳幼児の網膜にできるがん・網膜芽細胞腫の全国の患者の七割が治療を受ける。患者は韓国や台湾からも来る。

網膜芽細胞腫は、赤ちゃん一万五千人に一人の割合で発生する。昔は眼球を摘出するのが当たり前だったが、長年、班長を務めた厚生省（当時）の研究班で、網膜芽細胞腫に効く抗がん剤を突き止め、目の深部だけに注入する方法や独自の温熱療法などを開発、治療法を大きく発展させた。

おかげで、現在では、がんが小さければ100％、進行しても半分以上は摘出せずに治療できる。その功績で、今回の受賞となった。

東大の学生時代、クラスでただ一人、紛糾したインターン制度に賛成した。当時、脳外科医ベン・ケーシーがテレビの人気番組で、脳外科も考えたが、勧誘されて志望者がいなかった眼科医局へ。

「白内障などの治療だけでは物足らず、専門家がいなかった目のがんの勉強ばかりしていた」という。泣き崩れる患者の母親を説得、「疑わしきは罰する」という方針で眼球を摘出する治療に、「釈然としないものを感じた」。

国立がんセンターには珍しく、ひょうひょうとした感じのお医者さん。「希少価値でやってきた」と、目のがん一筋に取り組んだ医師人生を振り返る。奥さん、息子さんも眼科医だ。贈呈式は二十三日、都内のホテルで行われる。

（編集委員 平山 定夫）